

## 慰安婦言説の転換点： 千田夏光『従軍慰安婦』 を中心に

木村 幹\*

はじめに

さて、ここまで別稿<sup>1</sup>で日本、韓国、そして英語メディアにおける慰安婦問題に関わる、90年代にこの問題が外交化する以前の言説の展開について述べてきた。そこで明らかにしたのは次の事であった。

その第一は、慰安婦問題に関わる言説そのものは、慰安婦問題が日韓両国間の外交問題へと発展する90年代以前から存在した、という事であった。とりわけその言説は日本において韓国よりもはるかに豊富であり、この時期の日本人にとって慰安婦に関わる語りに接する機会は日常的に存在した。他方、慰安婦に関わる言説は韓国においても第二次世界大戦後の早い段階から存在したが、その量は日本より遥かに少なかった。

第二に、しかしながらその事は当時の慰安婦に関わる言説が、この問題が外交問題に発展した後の言説と同じであった事を意味しなかった。この点において日韓両国に共通していたのは、慰安婦を巡る言説の多くの部分が、慰安婦問題それ自身を中心としてなされていた、というよりは、第二次世界大戦や日中戦争、更には植民地支配等の「大きな絵」を描く際の「背景」としてなされていた事であった。それは90年代に外交問題化して以降の慰安婦問題に関わる言説が、戦時の問題に関わるものとして以上に、「それ自体」として扱われたのとは状況を大きく異にしていた。

第三に、とはいえこのような日韓両国の間には言説の量以外にも大きな違いがあった。まず日本において特徴的であったのは、慰安

\* 神戸大学大学院国際協力研究科教授

慰安婦を巡る問題が戦後の混乱期に出現したセックスワーカーを巡る議論との連続性においてなされていた事である。他方、このような慰安婦を単なる「過去」の問題としてのみではなく、第二次世界大戦後の「現在」の問題と結び付ける言説は韓国において、多くはなかった。韓国における極めて早い時期の慰安婦に関わる言説は、第二次世界大戦時に関わる部分に限定されており、それを解放後も存在したセックスワーカーとの関連で論じるものは、少なかった。韓国においてこの問題が「現在」のセックスワーカーとの関連で論じられるようになるのは、むしろ、1980年代末に女性運動家達がこれを取り上げる様になってからの事である<sup>2)</sup>。

他方英語メディアにおいては、状況は大きく異なっていた。即ち、第四に英語メディアにおいては、外交問題化する以前における慰安婦に関わる言説は極めて少なかった。また、例外的な少数の事例もその大半は、日本人が自ら海外に対してこの問題を訴えかけたものであり、英語メディア、或いはそれが本拠を置く諸国内部から自発的に為されたものは殆ど存在しなかった。そしてその事は、英語メディアやそれらが本拠を置く英語圏の国々においては、外交問題化以前の段階において、慰安婦に関わる固有の言説がほぼ存在しなかった事、そしてそれ故に、そこにおいては、日韓両国に存在したような既存の言説が新しい言説に置き換えられる過程は存在しなかった事を意味していた。だからこそ、英語メディアにおいては、90年代初頭、この問題が

外交化した当時の日韓両国における言説がそのまま受け入れられ、定着していく事になった。

だとすると、重要なのは何故、当初は今日のものとは異なるものであった日韓両国における慰安婦を巡る言説が、今日のような形に変化したのか、という事である。そしてここで留意しなければならない事がある。それは慰安婦問題が日韓両国間で外交問題化した時期と、この時期以降に主たるものとなった言説が形成された時期は必ずしも同じではない事である。

この点をより正確に言えば次の様になる。90年代初頭、慰安婦問題が外交問題化した時点において、先に述べたような戦後すぐに存在した古い言説は既に大きく影を潜めていた。即ち、既にこの段階では、慰安婦問題は、第二次世界大戦や日中戦争、更には植民地支配の単なる「背景」以上の意味を与えられており、また、敗戦直後に出現したセックスワーカーと関係で論じられる事も少なくなっていた。言い換えるなら、90年代初頭の時点では既に現在の様に、慰安婦問題それ自身を「独自の問題」とする言説が主流となっており、またこの問題を植民地支配と女性問題の枠組みで考える事は当たり前になっていた。だからこそ90年代初頭の議論は、この「植民地支配問題」と「女性問題」としての慰安婦問題、という既に出来上がっていた枠組の上で展開される事になる。

明らかな事は、慰安婦問題が外交問題へと発展した90年代初頭以前に、慰安婦問題を

巡る言説の転換点が存在した事である。そしてこの様な転換点を考える時、一つの大きな指標となるのが、千田夏光『従軍慰安婦：“声なき女”八万人の告発 [以下、『従軍慰安婦』と表記]] (双葉社、1973年) である。既に別稿でも簡単に論じた様に、同書はこの時期における数少ない、そして他に比べて極めて早い時期に、慰安婦問題を、単なる第二次世界大戦や日中戦争、更には植民地支配の「背景」としてではなく、「それ自体」として取り上げた著作であり、また不十分ながら韓国での取材を敢行するなど、植民地支配や女性問題を明確に意識して、慰安婦問題を取り上げた著作でもあった。そしてこの様な千田の著作はベストセラーとなり、後の慰安婦を巡る言説に決定的な影響を与えていく事になる。

そこで本稿では、主としてこの千田夏光と彼の慰安婦問題に関わる著作の形成過程を追いながら、慰安婦問題を巡る言説の展開について考えてみる事にしたい。議論は次の順序によって展開される。

第一に千田夏光の経歴について分析する。これにより彼の個人的経歴や歴史的背景が彼の著作や歴史観にどの様に反映されているかを明らかにする。第二に『従軍慰安婦』に先立つ時期の千田の著作を概観し、慰安婦問題に関わるようになる以前の千田の思想的状況について明らかにする。第三に、千田の初期の慰安婦に関わる著作、とりわけ『従軍慰安婦』とその前後に書かれた著作を分析する事により、彼の慰安婦問題への関心がどの様に形成

され、発展したのかを分析する。第四にこの様な千田の理解が後の慰安婦問題に関わる言説に与えた影響について議論する。最後にこのような慰安婦問題に係る言説の展開過程から、歴史認識問題の発展過程に関わる理論的示唆について考察する。

それでは早速、本論に入っていく事としよう。

## 第1章 「植民地の子」

さて、まず千田の経歴について簡単に見てみよう。千田は1924年、当時は日本の租借地であった関東州の大連に生まれた。夏光はペンネームであり、実名は貞暁、貞の字は千田家に代々伝わる通字である。夏光の曾祖父は元薩摩藩士であり、貴族院議員や広島県知事等を歴任した千田貞暁<sup>3</sup>であるから、維新時に名を成した明治以降の名家の出身という事ができよう。貞暁は、広島に宇品港を開削した事を称える廟社<sup>4</sup>まである人物である。

この千田の家系を考える場合に重要な事は、貞暁の存在以外に幾つかある。一つは、千田貞暁の子の多くが軍人になったという事である。そのうち継嗣である千田嘉平は陸軍士官学校を経て陸軍入隊、少将まで昇進、その後貴族院議員等を経て1943年に死去している<sup>5</sup>。しかしながら、軍人としてより華やかな経歴を歩んだのは彼の弟達であった。千田貞敏は海軍兵学校を経て海軍に入隊、黎明期の海軍航空隊を支えた人物として知られている。その弟である千田貞季もまた陸軍士官

学校を経て陸軍軍人となり、「歩兵の専門家」として知られた人物である<sup>6</sup>。

そして第二に重要なのは、この様に軍人として栄達を遂げたかに見えた夏光の祖父世代のキャリアが第二次世界大戦により暗転する事である。即ち、太平洋戦争開戦後、第14連合航空戦隊や第28根拠地隊司令官を歴任した貞敏は、1944年ニューギニアのピアク島において戦死した<sup>7</sup>。同じく仙台陸軍幼年学校長等を歴任した貞季もまた、小笠原兵団第109師団混成第2旅団長として派遣された硫黄島で戦死する事になっている<sup>8</sup>。

千田はこのような自らの家系について語る事は極めて少なく<sup>9</sup>、とりわけ軍人であった祖父の世代については、何一つ自ら書いていない。ともあれ重要な事は、この様な家系に育った事が、幼少年期を大連で過ごした事と併せて、千田に大きな影響を与えた事である。例えば、千田は後の生涯を顧みたインタビューの中で、自らを「差別に気づかぬ『植民地の』子」であった、と回想している<sup>10</sup>。このインタビューの中で、彼は幼少期の二つの思い出について語っている。即ち一つは、大連一中時代の思い出であり、それは次のようなストーリーになっている。中学生であった千田は、日本人が受けられた米の配給を中国人であるが故に受けられずに困っている同級生がいる事を知り、この同級生の家に米を持って行った。しかし、感謝の意を繰り返す母親の背後で、同級生は千田を「ギラギラとする眼」で睨むばかりであり、その後学校に来なくなった、という話である。

そして、この話は同じ回顧の中でのもう一つの思い出とオーバーラップして語られる。話は満州事変の頃に遡る。大連の千田の自宅の周囲には貧しい中国人の子供がおり、千田の母は家政婦を通じてこの子供に食事を与えていた。ある日、千田はこの家政婦に代わり、この子供に与える食事を自ら持って行った。しかし、子供からの感謝の言葉を受けて満足げに帰宅した千田を待っていたのは、冷たい家族からの言葉だった。「いいことをしたと思っているのか」。この言葉を千田は複雑な思いをもって述懐している<sup>11</sup>。

こうして後に、大連における記憶を苦々しく振り返る千田であるが、その事は幼少時の彼が当時の状況に大きな矛盾を感じていた事を必ずしも意味しなかったようである。背景には千田自身が、この「植民地人<sup>12</sup>」としての生活にどっぷり浸かった中、育った事があった。千田の父は、南満州鉄道株式会社の土木技師として大連に渡った人物であり、一家はその収入の下、裕福な暮らしを送っていた。家には中国人の家政婦と料理人がおり、二人の姉と妹、つまり三人の姉妹はロシア人教師からピアノを習っていたという。父親は満州事変後には南満州鉄道を辞め、不動産業を起こし、一家はさらに裕福な暮らしをする様になった。千田はこの当時について、母親は高価な毛皮を首に巻き、姉妹が使っていたピアノはドイツ製になった、と記している。つまり、千田は戦争が自らの利益に直結するような環境で育った事になる。家には日本軍軍人や関東軍の関係者が出入りし、幼少期の千田

は彼らから満州事変から日中戦争に関わる話を聞いたという<sup>13</sup>。

ここで注意しなければならない事は、「満州で生まれ育った」事が、千田自身が「戦争やそれに付随する苦難を直接経験した」事を意味しない事である。例えば、他の多くの満州移民や関東州育ちの人々と異なり、千田は「引き上げ」を経験していない。大連一中を卒業した彼は東京の日本大学に進学し、在学中の1944年に学徒動員され、配属先の鹿児島県で終戦を迎えたからである。つまり、彼が知る大連とは、「植民地人」としての日本人が君臨する「アカシアの並木」が立ち並ぶ、戦時にも拘わらず平穏を維持する「植民地都市」としての大連であり、その後ソ連の侵攻による混乱したこの都市の姿を彼が直接目にする事はなかったのである<sup>14</sup>。

敗戦間際の自らについて「天皇のために死ぬつもりで本土決戦に備えた」と回想する千田は、直後に迎えた敗戦を「足元が揺らいだ」思いで迎えたと言っている<sup>15</sup>から、この時点での彼は依然として、忠実な「植民地の子」だったと言うのが適切であろう。そして実際、千田にとって敗戦は「足元が揺らぐ」以上の自らを取り巻く環境の変化をもたらした。何故なら、大連に残された千田の家族は、ソ連軍が攻め込んだ大連において全てを失う事になったからである。敗戦後の混乱の中、父は「敗戦直後に“大連”で死に、母と姉妹が帰国したのは3年後<sup>16</sup>」だったというから、この間の千田は家族との連絡さえ一切取れなかった状態にあった筈である。彼はこの時の家

族の経験を「ソ連兵の侵攻をうけ他人様には軽々に語れぬそれなりの辛酸をなめ、乞食そのままの姿」で帰国した、と後に記す事になる。

千田にとっての敗戦とは、それまで存在した裕福な家系のバックアップを失い、敗戦後の日本社会に突然放り出された事を意味していた。それでは戦後の千田は、如何にして生き、どの様にして「慰安婦問題」にたどり着いたのであろうか。次にその点について見てみよう。

## 第2章 失われつつある美

復員後千田は、日本大学に戻ったものの、学業を最後まで取める事はできず1947年に中退する。この時期は千田の家族が大連から戻る前後の時期であるから、「乞食そのままの姿」で帰国した、女性ばかりの家族を支える負担が彼に重くのしかかった事に疑いはない。全財産と父親を失い、母と三人の姉妹を支える境遇になった彼は、アルバイトをしながらなんとか食いつなぎ、1950年、毎日新聞社にて働く様になる。社会部で活躍した、とされるが正式な社員の資格は持たず、「文房具を買うような社会部の経費」で雇われた臨時雇いの存在であったようである<sup>17</sup>。言い換えるなら毎日新聞社との千田の間には雇用関係はなく、故に同社には、署名記事は勿論、この頃の千田に関する記録は何一つ残されていない、という<sup>18</sup>。

社会部では都内版を担当し、「優秀な記者



として活躍した」千田であるが、臨時雇いの記者達の給料は安く、安定した生活は得られなかった。千田自身の回顧によれば、5年後の1955年に毎日新聞での仕事を辞めた、とされているが、このあたりの彼の回顧はあまり正確でないようである。ある毎日新聞関係者によれば、毎日新聞社ではこの頃、労働組合によって、千田のような低賃金の臨時雇いの記者の存在が問題とされ、彼らは臨時に設けられた試験を受けた上で、正社員に昇格する事となっていた。しかしながら、この臨時試験の時期、千田は不幸にも結核にて隔離されこの試験を受ける事が出来ず、正社員に昇格する事はできなかった。こうして彼は逆に仕事を打ち切られてしまう事になったのである<sup>19</sup>。

後に千田は、この毎日新聞との離別を、戦争の実態を知り「戦争に踏みつぶされた人々を書く為」だったと答えている<sup>20</sup>が、それはむしろ千田自身によって為された後付けの理由であった、と考える方が正確であろう。ただ、彼はその後も毎日新聞社の仕事を様々な形で手伝う事になっているから、少なくとも「喧嘩別れ」するような状況でなかった事だけは確かである<sup>21</sup>。

毎日新聞「退社」後の千田は、夕刊紙の社会部長や、女性誌で記事のリライト、さらにはラジオやテレビの仕事<sup>22</sup>を請け負うなど、様々な仕事を行っていたようである。しかしながら、この時期の彼の仕事の大半は、新聞や雑誌に自らの名前を出さない形での執筆や編集をする事であり、それ故に具体的に当時

の彼が何を考え、どんな記事を書いていたのかを直接確認する事は今日、不可能に近い。

言い換えるなら、生涯において60冊を超える著書を残した千田であるが、自身の名を冠した形での「作家<sup>23</sup>」としての「デビュー」は決して早くはない。国会図書館のNDL-OPACや国立情報学研究所のCiNii等、利用できるデータベースにおいて、千田が著者等として奥書等に自らの名前を明確に記した最も早い時期の著作として表れるのは、堀越二郎と共に監修した、『驚異の戦闘機ゼロ戦』（盛光社、1967年）である<sup>24</sup>。43歳になる年の著作であり、当時としては極めて遅いデビューと言わなければならないであろう。

少し詳しく見てみよう。この著作を千田と共に監修した堀越は、アニメ「風立ちぬ」の主人公のモデルとしても知られる<sup>25</sup>、ゼロ戦、つまり零式艦上戦闘機の設計者であり、この時期立て続けに自らの回顧録をものにしていった人物である。つまり、堀越はこの時期には既に著名になっていた人物であり、千田はその彼と組んで最初の「著書」をものにする機会を得た事になる。別稿でも論じた様に、当時はいわゆる「戦記物」の全盛期であり、見方を換えれば、千田もまたこの「戦記物」ブームに乗って自らのデビューの機会を得た事になる。

この時点では、取り立てて目立つ「作家」としての業績のなかった千田が、堀越と共にこの書籍を監修するに至った経緯はわからない。ただ、明らかなのは千田の祖父の世代に海軍航空隊の創設者の一人である貞敏がお

り、堀越はこの貞敏の生前に交流を有していたであろう事である。つまり、軍人の家系に生まれ幼少期を満州で過ごした千田は、そのバックグラウンドを生かして執筆活動をはじめた事になったのかも知れなかった。

当時の千田にとって航空機に関わる執筆活動は一つの軸となっていたようであり、彼は続く2年後の1969年、初の自らの名前を奥書に置いた単著である『日本の航空機』を著し、嘗ての勤務先だった毎日新聞社から出版している。同じ年には『占いの科学』という著作もやはり毎日新聞社から出版しているから、毎日新聞との縁が「作家」になった後の彼にとって依然、貴重であった事は明らかである。

興味深いのは、このような初期の千田の著作の内容が、「戦争に踏みつぶされた人々を書く為」に記者を辞めた、とする千田自身の後の回顧と大きく異なっている事であろう。なぜなら千田の同時期の著作に見られるのは、過去への反省よりも寧ろ、強い郷愁であるからである。即ち『驚異の戦闘機ゼロ戦』で戦前の日本の技術水準を激賞した彼は、続く『日本の航空機』では、著者紹介で自ら、「飛行機の爆音が聞こえると外に飛び出す無類の飛行機好き」だったと記している。そこに満州最大の軍港であった大連で、駐屯する日本海軍飛行隊の姿を、憧れを持って眺めていた軍国少年の姿を重ね合わせるの是不自然ではないだろう<sup>26</sup>。

この様な過去への郷愁は、同じ時期の千田の著作群を見ると更に明確になる。この時期

の千田は、先の「戦記物」（より正確には「航空機物」とは別に、様々な紀行文や旅行記、更には鉄道関係の記事を執筆している<sup>27</sup>。そして、これらの著作にはやはり明確な共通点が存在する。それは「失われつつある美」への関心であった。例えば、1973年に出版された『どん行列車の旅<sup>28</sup>』は、この「失われつつある美」を求めて旅する千田の紀行記であると言って良い。そこには、慰安婦問題において脚光を浴びる以前の千田の異なる志向が典型的に表れている。

ここで興味深いのは、この時点での千田の著作が、後の同じ千田のそれらが反ナショナリズム的な性格を有しているのとは対照的に、寧ろナショナリズムとの深い関連を有している事である。例えば、1971年1月、千田は雑誌『日本及び日本人』に「風土になごむ心こそ」という小文を掲載している<sup>29</sup>。この文章は巻頭言に続いて掲載されているから、この号において千田の文章が重視されている事がわかる。

『日本及び日本人』は、その表題からもわかる様に、明らかなナショナリズム的傾向を持つ雑誌であった。千田の一文が掲載された同じ号には続いて、直前に割腹自殺を遂げた三島由紀夫に捧げられた、村上一郎「自刃抄：三島由紀夫の霊に」が掲げられ、更に1969年に書かれた三島自身の「栄誉の絆でつなげ菊と刀」が再掲されている。千田は翌1972年1月にもこの同じ『日本及び日本人』に、「文化情況と手作りへの回帰」という小文を寄せている<sup>30</sup>。この号では、巻頭言に続いて、見

玉誉士夫の筆になる「アジアの民族的使命について」というナショナリスティックな文章が掲げられ、千田の文章の後には「日本ナショナリズムの基底を考える」と題する特集も組まれている。そしてこの雑誌における千田の執筆活動は、実に1978年<sup>31</sup>まで続けられている。

この様にして見ると、『従軍慰安婦』執筆以前の千田の著作活動は、後の一連の著作や、先に触れた「戦争に踏みつぶされた人々を書く為」に毎日新聞を離れた、という千田自身の後の回顧とは、かなり異なるものであった事が改めてわかる。

だとすると、ここで問題となるのは、千田は何故にこの時期、後の時代のそれとは一見、大きく異なるような作品を執筆したのか、という事である。この点については、千田が自身説明を残していない以上、推測によるしかない。だが、その作品群の内容から考えて、次の幾つかの説明が可能であろう。

第一は当時の千田は「作家」としての自分の行く末を未だ決めかねており、また家族を支える必要等の、経済的な理由もあって明確な方向性を決めずに「書けるものを書いていた」という説明である。千田が自らの「作家」としての方向性を決め兼ねていた事の一つの表われは、この時期までの彼がドキュメンタリーのみならず、小説をも執筆していた事かも知れない。例えば、そのような小説群に、『別冊サンデー毎日 読物専科<sup>32</sup>』に3回に渡って連載された「捜査一課シリーズ」と銘打たれた短編小説群がある<sup>33</sup>。「捜査一課シリーズ」

と銘打ちつつも、特定の警察署を舞台とする訳でもなく、共通の主人公さえ持たないこの小説群の一つの特徴は、この媒体に相応しく、多分にセクシャルな描写を含んでいる事である。この今日から見てもあまり出来栄が良いとは言えないこの小説群は、連載三回目には遂に舞台は「捜査一課」とは無関係な、千田自身をモデルとすると思われるM新聞記者を主人公とするものになるなど明らかな逃走状態になっている。

ともあれ明らかな事は、後に「社会派ルポライター<sup>34</sup>」として知られる事になる千田が、この時期、実に様々な執筆活動を試している事である。それでは、この時期の千田の活動が何らの方向性も持たない支離滅裂なものであったのだろうか。例えば、既に述べた様に、後に『従軍慰安婦』がベストセラーとなり、「社会派ルポライター」として名を成した後も、千田は1978年まで『日本及日本人』への執筆を続けている。この様な『従軍慰安婦』に見られるような社会批判と、『日本及日本人』に見られるようなナショナリスティックな執筆活動の共存は一見奇妙に見える。

しかしながらその事は、千田が書いている内容を具体的に見れば、全く違って見えてくる事になる。なぜなら、この当時の彼の著作には先に述べたような「失われつつある美」に対する強い関心があり、それがこの時期の著作の多くを貫くものだからである。即ち、航空機に関する著作にせよ、旅行記にせよ、この時期の千田の著作の多くは、「失われた」、或いは「失われつつある」存在に対して向け



られていた。それは或いはゼロ戦であり、蒸気機関車であり、また工業化の中で見失われつつある手工芸の美であった。千田は次の様に記している。

いま日本文化は音をたて雪崩現象を起こしている。その現象が戦後のものであることは間違いないのだが、それが、これだけのことで敗戦という現象の前で起こした精神風解作用の結果だとみるのには問題がある<sup>35</sup>。

ここで興味深いのは千田が、嘆き悲しむ日本文化の崩壊の原因を、必ずしも敗戦に求めている事である。彼は言う。

日本の状態が大きく変わったのは、この農本主義的な行き方から脱皮し工業国家へと指向しはじめてからのことであった。それにはアメリカ的生活様式への憧憬のあったことはいなめない。が、それ以上に資源のない島国々家として、海外より原材料を輸入し加工し加工品を輸出しなければ近代国家として国家維持、もしくは経済繁栄がもたらされなければならないとの自覚への志向とする方が正しいだろう。はっきり言って農本主義的なものの棄却である<sup>36</sup>。

重要なのは、千田が日本文化の崩壊の根本的原因を、敗戦でも、アメリカによる政治・経済・社会等の改革圧力によるものだとも考えていない事であろう。即ち、彼によれば日本が嘗ての「美」を失うに至った理由は、日

本自らが国家維持や経済発展を追い求めた結果なのである。

我々は或いはここで、彼が大連の日本人社会という、文字通り「失われた社会」に生まれ育った、という事実との関連を垣間見る事ができるかも知れない。アカシアの並木に代表される美しい街並みと雑然とした中国人地区。千田が豊かで恵まれた生活を過ごした大連の社会は、日本自身が起こした戦争が敗戦に終わるとともに永遠に失われた。この大連生まれの「植民地少年」としての思いを大連一中において千田の3年後輩にあたる原口統三は自らの遺稿である『二十歳のエチュード』で次の様に記している。

故郷はない。それなのに、僕は己の故郷以外の土地には住めない人間なのだ<sup>37</sup>。

よく知られている様にこのような失郷感、原口のみならず、多くの満州生まれの人々に共通するものであった<sup>38</sup>。千田にとっても、大連が特別な土地であった事は、自らの戦後の歩みについては殆ど語らなかった彼が大連時代の記憶については、度々記している事からわかる。しかしながら、千田の大連への思いには多くの大連生まれの人々とは、異なる部分もあった。後に自らの大連時代を振り返った著作『植民地少年ノート』にて、千田は次の様に記している。

(大連出身の日本人が) 思いだすのはアカシアかおる街であり、残飯少年の上にあぐら

をかいていたことを知ろうともせずに語る包子の味でありサンザシのことだけである。酒席で「麦と兵隊」を合唱しながら日中友好を叫ぶ人たちと違わないのである。私の場合で言えば、何年かまえ中学校の同窓会で、

渤海湾頭帝国が、植民拓土の策源地、大大連を瞰下して…

そんな往時の中学校の行進歌などうたわされ、しかも涙を浮かべうたう者までいるのを見て、二度と顔を出すのをやめたけど、[大連出身の人々と異なり、1945年に中国人労働者殺害事件の起こった]花岡の町には、あのかのときのことを忘れまいとする人が多い<sup>39</sup>。

この様な千田の同窓生に対する違和感が、彼が大連時代から有していたものか、或いは後に彼が「社会派ルポライター」として多くの調査や経験を経て後に生まれたものであったのかはわからない。

ともあれ、明らかな事は「植民地の子」千田がこの時期には未だ試行錯誤の中にいた事であった。1973年、『従軍慰安婦』が出版されるのと同じ年、彼は自らについてこう記している。

1924年大連（現在の中国旅大市）に生まれる。大連一中、日大、毎日新聞記者を経て文筆活動に入る。たいしたもの、意味のあるものは書けないと自分自身で考えている。「僕の人生は燃える楯火のようなものだ。それももう半分灰になっているのです」というのが

口ぐせ<sup>40</sup>。

千田は未だ試行錯誤のさ中にあり、自らの文筆家としてのアイデンティティさえ見いだせずにいた。しかし、このような彼の歩みはやがて整理されていく事になる。次にその点について見てみる事にしよう。

### 第3章 「慰安婦」との出会い

ともあれ、こうして千田は「作家」としての活動を開始し、次第に活動の範囲を広げて行った。しかし、その彼はやがて『従軍慰安婦』を出版し、「社会派ルポライター」としての地歩を築く事になる。それでは千田はどの様にして慰安婦問題と出会い、またその出会いは、その後の彼の活動をどの様に変えて行ったのだろうか。

千田の慰安婦問題との出会いについては、この問題での彼の最初の著作である『従軍慰安婦』の「おわりに」にて彼自身が書いた文章がよく知られている。少し長くなるが、この有名な文章を改めて引用してみよう。

私が慰安婦に興味をおぼえたのは、昭和39年毎日新聞社が写真集『日本の戦歴<sup>41</sup>』を発行したときであった。この写真集は『毎日グラフ』別冊として編集されたが、15年戦争を通じ毎日新聞特派員が撮影して来た、2万数千枚の写真の選別から編集までを私は受持ってきた。

ところがその作業の中に数十枚の不思議な

女性の写真を発見したのである。兵隊とともに  
行軍する朝鮮人らしい女性。頭の上にトラ  
ンクをのせている姿は朝鮮女性がよくやるポ  
ーズである。占領直後とおぼしい風景の中で  
和風姿で車に乗り込む女性。中国人から蔑み  
の目で見られている日本髪的女性。写真ネガ  
につけられている説明に“慰安婦”の文字は  
なかった。が、この女性の正体を追っている  
うちに初めて“慰安婦”なる存在を知ったの  
であった<sup>42</sup>。

一見わかりやすい説明であるが、不思議な  
点がある。それは、ここまで述べてきたよう  
な経歴を顧みたま時、千田は本当にこの時まで  
慰安婦の存在を知らなかったのか、と言う事  
である。幼少期を大連で過ごし、家には日本  
軍軍人や関東軍の関係者が出入りする環境に  
あった千田は、幼少期から満州事変や日中戦  
争に関わる話に触れる機会を多分に有してい  
た筈である。また、終戦間際の1944年には、  
彼自身が動員され、鹿児島にて軍隊生活を  
経験している事も既に記した通りである。

そもそも別稿で既に述べた様に、第二次  
世界大戦後の日本では、慰安婦の存在は決して  
タブーではなく、多くの慰安婦を題材にした  
自叙伝や小説が書かれ、また週刊誌には度々  
この問題にまつわる記事が掲載されていた。  
「作家」として多くの雑誌に多様な文章を執  
筆した千田が、このような言説に全く触れな  
かったとは正直、考えにくい。

そして、この推測が正しい事は千田がその  
主著『従軍慰安婦』の以前に書いた慰安婦に

関わる文章を見れば明らかになる。誤解され  
がちであるが、千田にとって『従軍慰安婦』は、  
彼が慰安婦問題についてはじめて執筆した文  
章ではない。確認できる限り、千田が慰安婦  
についてはじめて書いたのは、「特別レポー  
ト：日本陸軍慰安婦」と題する、『週刊新潮』  
の1970年の記事であった<sup>43</sup>。この13ページ  
に及ぶ記事は、ある程度の注目を集めたよう  
であり、彼はこれを受ける形で、翌1971年  
には雑誌『決断<sup>44</sup>』に「『お国のために』働い  
た12万慰安婦」という文章を書いている。  
彼はここでも自らと慰安婦問題との出会いに  
ついて記している。その内容は次の様になる。

あの写真集の持つ意味の“何分の一”かは、  
戦後20年、なぜか旧陸軍幹部はもちろん、  
従軍経験者が公に口にすることをタブーにし  
てきた“慰安婦”の写真を掲げたことにあっ  
た。それも明らかに朝鮮人とわかる慰安婦が、  
北部中国の川を腰までまくり渡っていく姿に  
はじまる約10枚の写真を載せたことにあっ  
た。

正直のところ、私も話には聞いていたが、  
そうした慰安婦そのものずばりの写真がある  
とは思ってもいなかった<sup>45</sup>。

実際の『日本の戦歴』には慰安婦と思しき  
女性たちの写真は数枚しか掲載されていない  
から、この千田の回顧もまたあまり正確なも  
のではない。しかしながら明らかな事は、後  
の『従軍慰安婦』における記述とは異なり、  
千田がこの写真集の編集に当たった段階で既

に慰安婦の存在自体は「話には聞いていた」事であった<sup>46</sup>。実際、千田が繰り返し記している「北部中国の川を腰までまくり渡っていく」女性の写真のキャプションには、「日本軍もまた娘子軍をつれて歩いた。慰安婦と呼ばれる一群である。朝鮮婦人が多かった。彼女らはずねに進撃する部隊を追い第一線にむかったのだが、カメラをむけると白い歯をむいて笑った。望郷の思いを吹き消すためだったのかもしれぬ」と記されている<sup>47</sup>。その事はこの写真集の編集の段階で、既に千田がこれらの慰安婦に関する相当程度の知識を得ていた事を示している。

以上の事からわかるのは、千田が『従軍慰安婦』の出版に至るまでの段階で、この自らの慰安婦問題との「出会い」を事実とは異なる形で単純化して、「わかりやすく」整理してしまっている事である。背景にあったのは、この著作が発売された1973年の段階では、既に戦後生まれの「戦後世代」が多数を占める時代が到来していた事かもしれない。戦中生まれの「戦中世代」を含む彼らは、実際の戦場での記憶を持たず、故にその殆どにとっては戦争にまつわる「秘話」に属する慰安婦の存在については十分な知識を有していなかった。言い換えるなら、戦前世代の千田は自らの著作の読者の大半を占める事になる「戦後世代」の目線に近い形で、慰安婦問題との「出会い」をわかりやすく「演出」した事になる。

とはいえ、同時にその事は千田がこの時点で既に、慰安婦問題について「十分な」知識

を有していた事を意味しない。そのわかりやすい例の一つは、彼は先の雑誌『決断』の記事の頃までには、慰安婦問題を陸軍に限定されたものだと考えていた様に見える事である。実際、千田が最初に慰安婦について執筆した『週刊新潮』の記事のタイトルが、「特別レポート：日本陸軍慰安婦」であった事に現れている様に、1971年頃までの千田は慰安婦問題を陸軍に関わるものとして論じている。また先の『決断』の記事では、慰安婦の数を12万人とも記している<sup>48</sup>。後に出版された『従軍慰安婦』では、この数は「8万人とも10万人ともいう」と記されている<sup>49</sup>から、慰安婦の数もまたこの前後で変化している事になる。

とはいえそれよりも重要な事がある。それはこの時期の千田が一貫して先の写真集に掲載された朝鮮人女性に注目して議論している事である。千田が繰り返し触れている写真は『日本の戦歴』の21ページに登場するものであるが、実はこの写真だけからでは、そこに映っている女性たちが朝鮮半島出身者であるかを断定する事は困難である。「頭の上にトランクをのせている」女性もそれが渡河中の出来事である以上、大事な鞆が濡れないように、頭の上高く掲げる行為は、日本人が行ってもさほど不思議ではない。これ以外の女性が映っている同じ写真集の写真においても、朝鮮半島出身者であったかを見極めるのできる服装等をした者は存在しない。そもそも千田も自身記している様に写真集の基になった写真のネガには、彼女らが慰安婦であった

かどうかは記されていない<sup>50</sup>。

写真そのものから朝鮮半島出身者であると断定できない状況で、千田が彼女らを朝鮮人だと断定できた理由は二つしか考えられない。一つは千田がこの時点で慰安婦のかなりの部分が朝鮮半島出身者であった事を認識していた可能性であり、またもう一つは、この写真集の編集過程で慰安婦に関わる情報を入手した可能性である。

とはいえ、前者については1971年頃の著作に書かれていたような、千田の慰安婦に関わる不十分な知識を考えれば、千田が誰が朝鮮人であるかを見分けられる程の慰安婦に関わる豊富な知識を既に有していたか否かには疑問も残る。他方、この写真集の編集に当たって、千田と毎日新聞社は戦時に従軍カメラマンとして活躍した人々から直接聞き取り調査を行っており、千田がこの聞き取り調査から「写真に写っている人物」に関わる具体的な情報を得た可能性は強い。先に挙げた臨場感たっぷりのキャプションもまた、そのような聞き取り調査の産物であったろう。

しかしながら、それだけでは千田が何故に「朝鮮半島出身の慰安婦」に注目する事になったのかはわからない。その理由について千田は『決断』で次の様に記している。

ところがその一枚一枚を見ていくうち、私は不思議なことに気がついた。朝鮮人慰安婦がいずれもカラリとした明るさを見せているのに、日本人慰安婦のほうは、なにか翳りがあるのである。

なぜだろう。

みると、私の旧陸軍慰安婦に対する興味は、この時から始まったのであった。慰安婦に朝鮮女性が多かったことは聞いていたが、彼女らが自らすすんで、喜んで慰安婦となることはまず絶対にあり得ない。強制または半強制であるはずだ。その実態はどうだったのだろうか<sup>51</sup>。

こうしてここで重要な事が明らかになる。それは千田の慰安婦への関心が、後に彼が著書で説明したような、自らも知らなかった「旧軍関係者」が「戦中も戦後も秘密」に触れた事に対する驚きによりはじまったのではなく、自らがある程度情報を有していた、しかし間接的にしか知らなかった事実が「写真」という形で、想像していたものとは異なる形で、自らの目の前に現れた事に対する驚きからはじまった、という事である。そしてその想像とは異なる姿は、慰安婦の悲惨な境遇ではなく、写真上に現れた朝鮮人慰安婦らの「明るさ」であったのである。

そして、このような写真の上に現れた朝鮮人慰安婦の姿に対する彼の「違和感」の原因は明らかであった。大連にて幼少期を過ごした彼は、その身をもって植民地において、支配される側である人々が支配者である「植民地人」に対して、強い怒りを有していた事を理解していたからである<sup>52</sup>。だからこそ、彼は朝鮮人慰安婦の「明るさ」に違和感を持ち、その原因を突き止めようとして取材をはじめることになる。



こうして彼の代表作である『従軍慰安婦』が出来上がる事になる。それではこのような複雑な背景を持つ千田の著作が、何故にこの著作が当時の日本社会に大きな影響を与え、その言説の転換点となったかのだろうか。次にこの点について論じる事としよう。

#### 第4章 『従軍慰安婦：“声なき女”八万人の告発』とその影響

さて、千田の慰安婦への関心は『日本の戦歴』編集作業過程にて、この問題と向き合ってから15年近く立った1973年、『従軍慰安婦：“声なき女”八万人の告発』と題する著作となって一つの形となった。出版元は双葉社。『週刊大衆』や『小説推理』等の大衆雑誌の発売を、自らのビジネスの中核に置く会社であった<sup>53</sup>。

後に「社会派ルポライター」として知られる事になる千田の主著であり、慰安婦問題を語る上で大きな転換点となったこの著作が、例えば岩波書店のような「社会派」の「真面目な」出版社ではなく、大衆雑誌の出版を生業とする双葉社から発売された理由は、出版当初、この著作がどの様に位置付けられていたかを見ればわかる。例えば、1973年9月25日、双葉社は『読売新聞』紙上で同書の広告を打っている。しかも、同じ日の新聞にこの著作の広告を二つも打っているから、同社がどれほどこの著作に力を入れていたかわかる<sup>54</sup>。

そして双葉社が同じ日の新聞に二つもの広

告を打った理由もその広告を見ればわかる。即ち二つの広告のうちの一つは一面に掲載されており、そこでは他社の書籍の広告と並んで、同書の広告が堅苦しく並んでいる。これに対して同じ新聞の6面に掲載されたもう一つの広告では、同書の広告は、双葉社の主力雑誌であった『週刊大衆』と抱き合わせの形になっている。『週刊大衆』側のトップ記事は「新左翼各派“国盗り”の焦点」。それに立教大学助教授の一家心中事件を扱った「大場啓仁という男の女関係」という記事が続いている。加えて、千田の著作の真横に置かれたのは、「かつての愛人がぶちまけた、高峰三枝子との情事の記録」という芸能記事。さらにこの双葉社の広告の横には芸能誌として知られた平凡社の『週刊平凡』が並んでいたから、双葉社が千田の著作を真面目な社会派ルポルタージュとしてだけでなく、戦時の「男と女」に関わる著作としてもまた、売り出そうとしていた事は明らかだった<sup>55</sup>。

双葉社は以後も、『週刊大衆』と『従軍慰安婦』を抱き合わせにした広告を続け、『読売新聞』紙上だけでも1973年11月20日まで毎週同様の広告が掲載される事となっている<sup>56</sup>。他方、9月25日の『読売新聞』1面に掲載された「堅苦し」い形の広告は二度と掲載される事はなかったから、同社がこの著作に関わる社会派ルポルタージュとしての側面と「男と女」に関わる側面のどちらを重視していたかは明らかだった。

双葉社が同書の宣伝に力を入れ続けたのには理由があった。それは同書が実際売れてい

たからである。双葉社の宣伝によれば同書は発売から8週間の間に15刷りに入ったとされている<sup>57</sup>から、それが出版直後から出版社自身の予測を超えた大きなヒットとなった事は間違いがない。よく知られている様に、このヒットを受ける形で千田は翌1974年『続・従軍慰安婦：償われざる女八万人の慟哭』を同じ双葉社から出版する<sup>58</sup>。これにより千田は一躍「従軍慰安婦問題」で知られる「社会派ルポライター」としての地位を獲得した。

しかしながら、その事はこの時点において、慰安婦問題が後に見られたのと同じ文脈で受け止められていた事を意味しない。その点を象徴的に示すのは、この千田の『従軍慰安婦』を原作とする、と銘打つ東映「従軍慰安婦」という映画の内容である<sup>59</sup>。この映画は、ドキュメンタリーであった千田の「原作」とはかけ離れたフィクションであり、この映画を視聴したある人物は「戦前来何十本と作られてきた『娼婦映画』の定型を踏まえ」作られた、「戦争秘話」の娯楽映画というべきものだ、と評している<sup>60</sup>。登場人物も朝鮮人らしき女性が脇役で一人登場する以外は全て日本人であり、そこには朝鮮人慰安婦への関心からはじまった千田固有の慰安婦問題への関心よりも、別稿で紹介した田村泰次郎の作品「春婦伝」等との作品の連続性を強く見る事が出来る。

ともあれ重要な事は、この様にその出版の段階では千田の『従軍慰安婦』は、それまで日本国内に存在した古い従軍慰安婦に関わる言説の中で紹介され、また消化されていた事

である。このような本来の意図とは異なる形での興味本位な「男どもがニヤツとするような本<sup>61</sup>」としての、消費は千田に複雑な感情を与えていたようである<sup>62</sup>。

しかしながら、その事はこの著作が大きな意味を持たなかった事を意味しなかった。最も注目すべきは、この一連の千田の著作以降、慰安婦問題を朝鮮半島からの動員との関連で語る言説が急速に増えていく事である<sup>63</sup>。とはいえその事が千田の著作そのものが — 先に紹介したような彼の当初の動機とは異なり — 必ずしも慰安婦問題を朝鮮半島からの動員問題を明らかな中心に据えて書かれたものであった事を意味しなかった。

この点は千田が最初に執筆した慰安婦に関して執筆した「特別レポート：日本陸軍慰安婦」がその書き出しを韓国における元慰安婦との出会いに置いているのとは好対照である<sup>64</sup>。「御国の為に」と自らの身を挺した日本女性、挺身隊の美名の下に人身御供にされた未経験の朝鮮女性。皇軍に殉じて壮烈な死を遂げながら、勲章もなければ墓標もない彼女たちの実態を、豊富な資料ときめ細やかな取材によってまとめた貴重なドキュメント！」という双葉社の広告文<sup>65</sup>に表れた様に、この著作の中心に据えられたのは、朝鮮人慰安婦よりも日本人慰安婦であり、またその最大の焦点は当時の軍による慰安婦動員計画がどの様に進められたか、にあった。

さらに指摘しておくべきは、千田が自ら転換点として位置付ける『日本の戦歴』編集の頃から『従軍慰安婦』の出版に至るまでの一

連の著作を見た時、この時点での彼の著作活動が必ずしも従軍慰安婦問題を中心に据えたものであった様には見えない事である。より正確に言えば、『日本の戦歴』編集作業以後変わったのは、それまでは「ゼロ戦」等の個別の事物に対する関心を別にすれば、戦争に対する記述が殆ど現れなかった千田の著作に、突如として、戦争に関わるものが大量に出現する様になる事である。

例えば千田は先に紹介した『決断』の異なる号には、「24万軍馬の忘れられた戦歴」と言う文章を書き、戦時に動員された軍馬について記している<sup>66</sup>。また同じ1971年に出された雑誌『現代』には千田は、「日本人が初めて人肉を食った戦場」「万人坑」の悲劇は日本にもあった!という二つの文章を執筆し、それぞれニューギニアにおける日本軍の飢餓と、日本本土に動員された中国人労働者の決起事件である「花岡事件」について記している<sup>67</sup>。明らかなのは、この時期の千田の関心が戦時における悲劇的事件に向けられており、その文章がこれらの事件を告発するタッチで描かれている事である。

こうして見ると、千田において従軍慰安婦問題は、戦時において引き起こされた日本軍による「略奪戦争<sup>68</sup>」がもたらした悲劇の一事例として位置付けられていた事がわかる。

その意味で千田にとって『日本の戦歴』編集作業に伴う、戦争を巡る事実との再会は、彼の執筆活動にとって、戦争の実態と向き合い「戦争に踏みつぶされた人々を書く」切っ掛けになった、とは言える。しかしながらこ

の時点での彼にとっては、慰安婦はこの「戦争に踏みつぶされた人々」の一類型にしか過ぎなかったのである。

しかしながら、この『従軍慰安婦』のヒットは、これまで無名の「作家」の一人にすぎなかった彼が一躍知名度を上げるきっかけとなった。そして「従軍慰安婦問題の千田」という位置づけは、その後彼が先に述べた『続従軍慰安婦：償われざる女八万人の慟哭』に続き、『従軍慰安婦悲史：戦史の空白部分を抉る<sup>69</sup>』、『従軍慰安婦・慶子：中国、ガ島、ビルマ…死線をさまよった女の証言<sup>70</sup>』等の著作を出す事によって明確になる。こうして彼の「作家」の位置付けが決まり、千田は慰安婦問題をはじめとする戦争と女性問題に関わる文章を多数ものにする事となる。その意味で『従軍慰安婦』は千田自身にとっても自らの人生の方向性を明確にした著作であった、と言って過言ではない。

それではこのような『従軍慰安婦』に至るまでの千田の執筆過程から我々は何を学ぶ事ができるのであろうか。次にこの点について考えてみる事にしよう。

## 第5章 従軍慰安婦言説とその構造

まずここまで述べた事をまとめてみよう。

大連にて「植民地の子」として生まれた千田は、植民地支配の光と影を共に経験しつつ幼少年期を過ごした。そこには「植民地人」としての豊かな暮らしと、その陰に生きる現地中国人の二つの暮らしがあり、彼はその「矛

盾」の中に身を置きつつ成長した。

しかし敗戦と同時に、その世界は失われ、千田は戦後の混乱の中に放り出された。新聞記者を経て文筆業を志した彼であるが、その歩みは試行錯誤に満ちたものだった。失われた故郷をイメージさせる「失われつつある美」に惹かれた彼は、この時点では自らの人生に意味を見いだせず、苦悩に満ちた人生を送っていた様に見える。

しかしながら、彼の人生はある仕事との出会いで一つの転換点に到達する。戦争写真の選別と編集、という作業を任された千田はここで自ら封印していた戦争とそれを取り巻く状況へと直面する事を余儀なくされた。そしてここから千田は戦時の「隠れた歴史」の発掘作業へと取り掛かる事になる。この時点での千田にとって、従軍慰安婦問題はこのような中、取り上げられた問題の一つに過ぎず、未だ特別の位置を与えられていなかった。

このような千田の『従軍慰安婦』出版に至るまでの道筋を考えた時に鍵になるのが、千田が「戦争を知る世代」と「戦争を知らない世代」の境界線に位置する人物である事である。即ち、大連で生まれ育った千田は戦争に関する話を聞く機会こそ多かったが、中国大陸の「戦場」を経験した訳ではない。また、1944年に動員された後も千田は内地で本土決戦に備えた彼は、空襲等の経験を離れて、「戦場」での戦闘は経験しなかった。

一言で言えば、千田は常に戦場に近いところにいた一方で、実際の「戦場」は経験しなかった。同様の事は千田と大連からの引き上

げとの関係についても言えた。彼の家族が引き上げの過程で辛酸を直接舐めたのとは対照的に、先に本土に渡り、鹿児島にして終戦を迎えた千田は、その苦悩を直接経験する事はなかったからである。

その意味で、千田にとって戦場は常に「近いようで遠い存在」であった。或いはその事自身が文筆家に転じた直後の彼が戦争について語る事を躊躇した理由だったかもしれない。戦場を経験した人々が数多暮らす時代、戦場を知らない千田が戦争について執筆する事はリスクが多く、またその意味も少なかったからに他ならない。

しかしながら、写真集の編集等により、戦時の現実と向かい合わされた事により、彼を巡る状況は一変した。何故なら、ここにおいて千田は自らが戦場の事実について知らない事、そしてそれが多くの他の日本人にとっても同様であった事に改めて気づかされる事になったからである。この点について千田と交流関係の深い毎日新聞関係者はこう推測する。

千田さんは不運な人でご家族も引き上げで大変な目に遭われた。だから、ご家族の事はほとんどお話になれなかった。戦争で自分たちほど悲惨な目にあった人はいない、と思っておられたんだと思います。

でも、慰安婦問題との出会いで、千田さんは自分たちよりももっと悲惨な境遇にあった人達がいた事を知った。それが彼を慰安婦問題の取材へと突き動かした理由だったと思

ますよ<sup>71</sup>。

写真集の編集等の過程で目にした写真に写る風景や、戦場カメラマンらから耳にした話の多くは、千田にとって「話には聞いていた」が詳しくは知らないものだった。時代はすでに1960年代半ば、戦争が終わってから既に20年が経過しようとしていた時期の事であった。戦争に関わる記憶は既に失われつつあった。

明らかなのは、このような千田の『従軍慰安婦』に至るまでの過程が戦後一定の時期を経て登場する「歴史の再発見」の典型的なものである、と言う事である。戦争を知らないのは自分だけではない、いや、知っていると思っている人も実は知っているのは自らが直接経験した一部の事実だけであり、他人の境遇がどうであったかは知っていない。

その意識を明確に持っていたからこそ、後に書かれた『従軍慰安婦』で千田は話を少しだけ誇張する事になる。つまり、この著作において、彼は以前から「話には聞いていた」慰安婦問題を、この時「初めて」「知った」事にするのである。そしてそれはあるいは話をわかりやすくする為に、周囲が彼に期待したものであったかも知れなかった。

背景にあったのは、千田がこの著作を自らと同じ世代ではなく、自らよりもはるかに若い世代を念頭に置いて書いている事であらう。例えば、千田は『従軍慰安婦』のあとがきで、戦時の慰安婦問題と重ねる形で当時の新左翼運動の内部に存在した女性問題につ

いて触れている。重要なのは、千田が戦時の問題を単なる「過去」の問題としてではなく、「今」につながる問題として位置付けていく事であろう。千田は後にこう記している。

大変失礼だが「戦争体験を傳承しよう」うんぬんという言葉を聞いた時「はてな」と思う。戦争体験を傳承することへの必要性には異論ないのだが、それを語る人の姿勢に「なにか違うな」と感じるということである。

どこが「違うな」と思うかという、それを語るほとんど大半が“あの戦争”を昭和20年（1945年）8月15日で終わっている、つまり過去のものとしてとらえ、過去にあったこれこれしかじか[傍点ママ]のことを「忘れるな」という形で語られているよう思えてはならないということである。

とくに若い世代、戦争を知らない世代にそれが多いうということである<sup>72</sup>。

こうして見ると改めて千田の立ち位置が極めて微妙なものである事がわかる。即ち彼は自らが「戦争を知らない」事を意識しつつも、より若い「戦争を知らない」世代に対しては、戦争について教え諭す姿勢で接している。そこに垣間見えるのは自らを挟む二つの世代に対する不満であったかも知れない。既に述べた様に、千田は、戦争を過去のものとして顧みない若い世代を批判すると同時に、戦前の社会をノスタルジックに回顧する人々にも強い批判を寄せていた。両者に共通するのは、過去を現在と切り離して理解する姿勢であ



る。だからこそ千田は言う。「戦争体験の伝承ということについていえば、語る人がそのことを今日と結び付けなれば、単なる興味の伝承になるのではないかと思ったりするのだ<sup>73</sup>」、と。

重要なのは、千田が慰安婦問題という新しい問題を発見した事ではなく — 問題の存在そのものは以前から知られていた — それを彼が生きた「今日」と結び付けた事であつたろう。そしてそこにはそれまでの言説とは異なる二つの特徴があつた。その一つは既に述べた様に、彼がこの言説を「植民地」との関連で再解釈した事であつた。即ち彼はこれまで日本人慰安婦と朝鮮人慰安婦の立ち位置が明確に区別されていなかった状況から、朝鮮人慰安婦の存在を彼のいう「戦争に踏みつぶされた人々」の最も極端なものとして再解釈し、その淵源が植民地支配の非合理性にある事を強調した。だからこそ、彼の慰安婦に関わる言説は、それまでの支配エリートである将校達とこれに抑圧される兵士と慰安婦達、という図式から、朝鮮人慰安婦を切り離し、金一勉『天皇の軍隊と朝鮮人慰安婦』著作に代表されるような、慰安婦問題を植民地支配と結び付けて整理する様な次なる言説へと繋がっていったのである。

更に注目すべきは、再び千田がこの「植民地問題としての慰安婦問題」を、「今日」の問題として捉える視点をも有していた事である、千田はこう記している。

彼女の離婚が挺身隊のがれの結婚に原因が

あつたのか否かは最後までわからなかったが、挺身隊を調べに来たというだけの日本人に頭を下げ札を述べるとき、彼女にも何か大きく心に刻まれることがあつたと思うだけであつた。そして「民族的体質のようですね」いまもケロリとして語る日本人のいる事実。傷痕の消えるのはいつのことなのだろうか。いま韓国で発行されている週刊誌で評判になる小説は、必ず悪い日本軍人が主人公になり、彼らと彼女らに残酷な行為におよぶものである。なぜかこの事もソウル駐在の日本人記者は記事として日本へ送って来ない<sup>74</sup>。

こうして見ると千田の「民族問題として慰安婦」という視点の背後には、大連にて「植民地人」が現地人に差別的に接した事を見聞した「過去」の記憶と同時に、「今日」の日本社会の在り方を疑問視するもう一つの視点がある事がわかる。

そしてその点は千田の慰安婦に関わる言説のもう一つの特徴である、慰安婦問題を女性問題の観点からとらえなおす視点においても同様である。千田が慰安婦問題を女性問題の一部として考えていた事は、例えば、彼が度々慰安婦問題を従軍看護婦問題と合わせて議論している事に典型的に現れている<sup>75</sup>。千田の理解では従軍看護婦達もまた、その境遇の悲惨さの程度こそあれ、慰安婦と同じ「戦争に踏みつぶされた人々」であつたからである<sup>76</sup>。

そして千田が女性問題の観点からも、慰安婦問題を「今日」につながる問題として理解していた事は、彼が同時に、セックスワーカー

ーについての著作をも多数ものにしてきた事からも知る事ができる<sup>77</sup>。そのうちの一つ、1994年に出版された『ニコニコ売春』という著作<sup>78</sup>では、千田は日本におけるセックスワーカーの歴史を公娼制の成立から書き起こし、その極端な事例としての慰安婦問題について触れた後、戦後直後のセックスワーカーの境遇について述べ、その延長線上に当時のセックスワーカーを巡る問題を論じている。そこには明確に「女性問題としての慰安婦問題」を「今日」との関係で位置づけ直そうとする視点が存在した。

それでは以上の様な千田の言説とそれが齎した役割を踏まえて我々は慰安婦問題を巡る言説の成立過程をどの様に理解すればよいのだろうか。最後にこの点について触れて本稿の筆を擱く事としたい。

#### むすびにかえて：慰安婦問題の言説構造

慰安婦問題について戦後すぐから活発な言説が見られたのは日本であった。この言説は、主として復員兵達によって執筆された小説や回顧録の中で展開されていった。しかしながらこの段階では、これらの言説における慰安婦の存在は、戦時における将校を中心とするエリートと、これに抑圧される兵士等を中心とする非エリートの対立構造、という当時の日本国内における主たる戦争理解の中に回収されてしまっていた。慰安婦を巡る問題は合わせて戦後のセックスワーカーを巡る状況との連続性で理解され、そこでは日本人と朝鮮

人等という対立構造は強く意識されていなかった。そこには戦争直後の日本社会の状況が如実に反映され、人々はそれに大きな疑念を有してはいなかった。1960年代までの日本社会においては、多くの人が戦争の現実を経験しており、それ故「過去」を巡る話は、「回顧」ではあっても、「再発見」とは見なされなかったからである<sup>79</sup>。

しかしながら、やがて時間の経過とともに、これらの「戦争を直接知る人々の言説」は後景に退き、「戦争を知らない人々」による新たな言説が展開される様になる。とはいえ、このような言説が単なる「過去の回顧」以上の意味を持ち人々を引き付けるに至る為には、それを「今日」の何かしらと結び付け直す必要があった。

1924年に生まれ1944年に召集され、内地で戦争を終えた千田はこのような「戦争を直接知る人々」と「戦争を知らない人々」の境界の世代に属していた。だからこそ彼は時に自らの立場を — 意図的か偶然かはともかく — 「戦争を直接知る人々」と「戦争を知らない人々」の間で使い分ける事ができた。そして千田は戦争を巡る問題を「戦争を知らない人々」が「自らの問題」として理解する為のベクトルを二つ用意した。一つは「植民地支配」であり、もう一つは「女性問題」であった。

結果から言えば、この千田が「過去」を「今日」と結びつける為に用意したベクトルは、彼が執筆した他のいかなる問題においてよりも、慰安婦問題において上手く機能した。「植

民地問題」への関心が彼の大連時代の経験に由来する事は明らかであるが、他方の「女性問題」への彼の関心がどこに由来したかはよくわからない。或いはそれは彼が一生書く事がなかった自らの家族に関わる「他人様には軽々に語れぬそれなりの辛酸」と関連していたのかも知れなかった<sup>80</sup>。

尤も千田の初期の著作においては、このような二つのベクトルは、後の慰安婦に関わる著作においてと比べれば、依然、明確には表れていなかった。この時点での千田には、未だ日本人と朝鮮人や中国人を分けて議論する事に対する「迷い」があった。彼は以下の様に記している。

或る戦中派はこんなことを言った。

「われわれ日本の庶民も戦争の被害者であった。兵隊にとられ、遺骨も帰って来ない例は数限りないし、裸になった戦災者や引揚者も数限りない。慰安婦にされた朝鮮人だけが被害者ではない。それだけをクローズアップするのは問題でないだろうか。」

これに私は返す言葉がない<sup>81</sup>。

この千田の「迷い」は、戦争を経験し、その中で苦勞を強いられた自らと自らの家族の経験をどう位置づけるか、をも巡るものでもあったろう。しかし、千田に続く人々はこの「迷い」を軽々と乗り越えていった。つまり、彼らは「今日」の立場から「過去」の日本を弾劾し、その償いを「今日」において実現すべく活動する様になるのである。戦争を知ら

ない世代が多数を占める時代に入り、日本の「過去」を巡る言説環境は急速に変化しようとしていた。

こうして「運動」の時代が開始される事になる。慰安婦問題もまたこの運動の中で再解釈され、やがてその内容は千田が選び出した二つのベクトル、つまり「植民地問題」と「女性問題」が交差する地点、つまり、朝鮮人慰安婦を巡る問題へと絞られていく事になる。

結果、舞台は多くの当事者が居住する韓国へと移る。韓国の言説は日本の言説を参考に展開され、やがて女性問題の運動家達が本格的に参与する事によってその内容はますます絞り込まれていく事になる。言説が「植民地問題」と「女性問題」という二つのベクトルに絞り込まれた事により、また「運動」の対象もこの二つが交差する「男性優位の日本社会」に絞り込まれ、主たる批判対象を内部に持たない韓国の慰安婦言説は先鋭化した。他方、「運動」による攻撃対象となった日本側では言説の展開は遅れ、結果、90年代に入ると先鋭化された韓国側言説と、未整理状態の日本側言説が衝突する事になる。

言説の対立はやがて両国の外交的対立へと発展し、結果、この内容が国際社会に伝達される。こうして現在ある日本、韓国、そしてその外部の国際社会における慰安婦問題を巡る言説の構造が成立する。そして90年代の慰安婦問題はこの言説の対立をベースとして展開される事になるのである。

## 注

- 1 木村幹「日本における慰安婦認識：1970年代以前の状況を中心に」、『国際協力論集』25(1)、2017年7月、同「英語メディアの慰安婦報道とその傾向：90年代初頭の報道を中心に」、『国際協力論集』23(1)、2015年7月、「国際紛争化以前の韓国における慰安婦問題を巡る言説状況」、『国際協力論集』22(2)、2015年1月。
- 2 この点については、木村幹『日韓歴史認識問題とは何か』（ミネルヴァ書房、2014年）をも参照の事。
- 3 千田貞暁については、「維新の仲間たちへの思いが生んだ求心力 千田貞暁」、<http://www.umeshunkyo.or.jp/108/kaitakusya/248/data.html>（最終確認2017年9月26日）、に詳しい。また、「千田貞暁」、<https://kotobank.jp/>（最終確認2017年9月26日）。
- 4 千田廟社の現状については、例えば、「宇品歴史探訪：千田廟公園と千田貞暁」、[https://blogs.yahoo.co.jp/hirolin\\_m7/60442007.html](https://blogs.yahoo.co.jp/hirolin_m7/60442007.html)（最終確認2017年9月26日）。
- 5 霞会館華族家系大成編輯委員会編『平成新修旧華族家系大成』上（霞会館、1996年）、791ページ。
- 6 相馬裁『太平洋戦争の現場がわかる本』（チェリーハウス、2005年）、143ページ、等。
- 7 その死は、アジア歴史資料センター所蔵、「復員庁第二復員局辞令公報 甲 第26号」（昭和21年7月16日）、にて確認する事ができる。
- 8 なおこれらの千田家の家系に関わる情報は一部ウィキペディア百科事典を参考にしている。<https://ja.wikipedia.org/>（最終確認2017年9月26日）。
- 9 琴乗洞「故千田夏光氏を悼む：得がたい朝鮮の真の友」、『朝鮮新報』2001年1月22日、<http://korea-np.co.jp/sinboj2001/1/0122/51.htm>（最終確認2017年9月26日）。
- 10 「千田夏光・作家 差別に気付かぬ“植民地の子”（自分と出会う）」、『朝日新聞』1999年6月22日。
- 11 千田は同じ話を、次の著作でも行っているから彼にとって印象深いエピソードであった事は間違いない。千田夏光『植民地少年ノート』（日中出版、1980年）、15-19ページ。但し、話の内容やエピソードの事件が起こった年に若干の違いがある。
- 12 千田は植民地における日本人達を、その特有のメンタリティーを持つ者として「植民地人」、そこで生まれ育った少年達を「植民地少年」と呼んだ。例えば、千田夏光『植民地少年ノート』、210ページ。
- 13 千田夏光『植民地少年ノート』。また、明珍美紀「[悼] ノンフィクション作家・千田夏光さん」、『毎日新聞』2001年1月20日。
- 14 尤も、その事は千田が大連に住む中国人達の生活について全く知らなかった事を意味しない。例えば、彼は幼少期に大連にて働く中国人労働者の収容施設を見た経験を、『植民地少年ノート』に詳しく記している。
- 15 明珍美紀「[悼] ノンフィクション作家・千田夏光さん」。
- 16 千田夏光『植民地少年ノート』72ページ。
- 17 明珍美紀「[マルチウいんどー] 千田夏光さんを悼む 気骨あるジャーナリスト」、『毎日新聞』2001年1月20日。
- 18 毎日新聞関係者へのインタビュー。2017年9月29日、東京。このインタビューに当たっては、明珍美紀、澤田克己、下川正晴の各氏からご助力をいただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げます。
- 19 毎日新聞関係者へのインタビュー。関係者は当時の千田はとて優秀で、筆が早い記者であり、臨時雇いの記者の中では、図抜けた存在だった、と回顧している。
- 20 明珍美紀「[悼] ノンフィクション作家・千田夏光さん」。
- 21 後述の様に彼はその後も毎日新聞社関係の仕事を手伝う事が多かった。とりわけ『毎日グラフ』には、度々連載記事を執筆しており、その幾つかは後に書籍の形でまとめられている。事実、千田の初期の著書は多くは『毎日グラフ』連載の記事をまとめたものである。例えば、千田夏光著、毎日新聞社編『後継ぎはいないのか：かくれた名匠たち』（毎日新聞社、1965年）、千田夏光『古い科学』（毎日新聞社、1969年）、等。
- 22 毎日新聞関係者へのインタビュー。
- 23 この頃の千田は自らの職業を「作家」と記するのが通常であった。例えば、毎日新聞社編『人間国宝・重要無形文化財を保持する人々』（毎日新聞社、1967年）。
- 24 既述の様にこれ以前に『後継ぎはいないのか』が存在するが、同書はその奥書等に千田の名前は記されていない。また『古い科学』や『驚異の戦闘機ゼロ戦』等の初期の著作の「著者略歴」によれば、これ以外にも「白骨」「橘花」「海賊海太郎」の著作があると記されているが、管見の限りではその存在を確認する事はできなかった。
- 25 「映画『風立ちぬ』公式サイト：スタジオジブリ」、<http://www.ghibli.jp/kazetachinu/>（最終確認2017年9月26日）。
- 26 実際、千田の幼少期の回顧には航空機に関わる部分が存在する。千田夏光『植民地少年ノート』24-25ページ。
- 27 例えば、千田夏光「変わりポッポ」、『鉄道ジャーナル』1(2)、1967年7月、同「"D51・C12"がまだ健在<中央西線>」、『鉄道ジャーナル』2(9)、1968年9月、同「火の国のバカンス」、



- 毎日新聞社『日本の火山』（毎日新聞社、1970年）、関沢新一、千田夏光、青木栄一、竹島紀元「座談会：ヨーロッパ汽車の旅」、『鉄道ジャーナル』5(11)、1971年11月。また、千田夏光『どん行列車の旅』（サンケイ新聞出版局年、1973年）、同『民芸旅行』（日本交通公社、1974年）。
- 28 千田夏光『どん行列車の旅』（サンケイ新聞出版局、1973年）。
- 29 千田夏光「風土になごむ心こそ」、『日本及日本人』1493、1971年1月。
- 30 千田夏光「文化情況と手作りへの回帰」、『日本及日本人』1505、1972年1月。
- 31 千田夏光「職人の原像と職能人との交点」、『日本及日本人』1517、1973年5月、同「このしたたかなる地下水の湧出」、『日本及日本人』1522、1974年3月、同「さまよえる真善美の本質」、『日本及日本人』1528、1975年3月、同「いまも意気尽く職人道」、『日本及日本人』1533、1976年1月、「形顔化する"手づくり"への嘆き」、『日本及日本人』1539、1977年月、同「伝統心意への弁証的視角」、『日本及日本人』1550、1978年11月。
- 32 同雑誌は1968年の1回と1969年の2回の通算3回に渡って発行された後、廃刊になっている。故に千田の「捜査一課シリーズ」の連載も僅か3回の連載にとどまった様である。「国立国会図書館サーチ」、<http://iss.ndl.go.jp/>（最終確認2017年9月26日）。
- 33 千田夏光「捜査一課シリーズ：黒い表紙」、『別冊サンデー毎日 読物専科』1968年秋号、同「捜査一課シリーズ：大磯バラバラ事件」、『別冊サンデー毎日 読物専科』1969年新春特大号、同「捜査一課シリーズ：本当のことをおっしゃい!」、『別冊サンデー毎日 読物専科』1969年夏特大号。
- 34 明珍美紀「[悼] ノンフィクション作家・千田夏光さん」。
- 35 千田夏光「文化情況と手作りへの回帰」、14ページ。
- 36 同、15ページ。
- 37 喜多由浩「芥川賞作家・清岡卓行と、自死した後輩：戦争で失われた『故郷』への“強い想い”とは」、『産経ニュース』、<http://www.sankei.com/premium/news/151011/prm1510110014-n1.html>（最終確認2017年9月26日）。
- 38 例えば、大連出身の人々の「失郷感」については、次の著作によく表れている。大連一中創立五十周年記念事業実行委員会編集部会編『われらが心のふるさと大連一中』（大連一中校友会、1970年）。
- 39 千田夏光『植民地少年ノート』290-210ページ。
- 40 「著者・千田夏光」、千田夏光『どん行列車の旅』。
- 41 毎日新聞社編『毎日グラフ別冊：日本の戦歴』（毎日新聞社、1967年）。なお、この写真集に千田の名前は記載されていない。
- 42 千田夏光『従軍慰安婦・正篇』（三一書房、1978年）、219ページ。
- 43 千田夏光「特別レポート：日本陸軍慰安婦」、『週刊新潮』746号、1970年6月。
- 44 『決断』は、日本テレビが作成した同名のアニメーションの宣伝の為に発行された雑誌であり、そこには多彩な戦時のエピソードや写真が紹介されていた。アニメージュ編集部編『TVアニメ25年史』（徳間書店、1988年）、37ページ。
- 45 千田夏光「『お国のために』働いた12万人慰安婦」、『決断』6、1971年11月、128ページ。
- 46 毎日新聞関係者はこの点について、千田は、毎日新聞社の職を辞した後、当時の戦場を写した古いアルバムを見て従軍慰安婦の存在に気づいた、と語っていた、と回顧している。だとすれば千田の慰安婦問題との出会いは、千田が回顧する『日本の戦歴』編集作業より早い時期の、1960年代初頭の話になる。
- 47 毎日新聞社編『毎日グラフ別冊：日本の戦歴』21ページ。
- 48 千田夏光「『お国のために』働いた12万人慰安婦」、128ページ。
- 49 千田夏光『従軍慰安婦・正篇』、36ページ。
- 50 同219ページ。
- 51 千田夏光「『お国のために』働いた12万人慰安婦」、128ページ。
- 52 千田夏光『植民地少年ノート』の各所。
- 53 「双葉社」、<http://www.futabasha.co.jp>（最終確認2017年9月28日）。
- 54 『読売新聞』1973年9月25日。
- 55 千田自身もこの事はよく理解していた。毎日新聞関係者へのインタビュー。
- 56 『読売新聞』1973年10月2日、10月9日、10月16日、10月23日、10月30日、11月6日、11月13日、11月20日。
- 57 『読売新聞』1973年11月13日。結局、同書は20数版まで版を重ねたという。千田夏光『従軍慰安婦・正篇』、9ページ。
- 58 千田夏光『続・従軍慰安婦：償われざる女八万人の慟哭』（双葉社、1974年）。
- 59 映画「従軍慰安婦」については次の文献に拠った。佐伯俊道「映画『従軍慰安婦』とその周辺」、『シナリオ』71(9)、2015年9月。
- 60 尾形修一「東映映画『従軍慰安婦』（1974）を見る」、<http://blog.goo.ne.jp/kurukuru2180/e/63dc2185eef1594ab48ed7a0231f6e34>（最終確認2017年9月28日）。
- 61 毎日新聞関係者へのインタビュー。
- 62 この著作に対しては女性団体からの「興味本位に過ぎる」との非難すらあったという。毎日新聞関係者へのインタビュー。
- 63 典型的な例としては、金一勉『天皇の軍隊と



- 朝鮮人慰安婦』（三一書房、1976年）。
- 64 千田夏光「特別レポート：日本陸軍慰安婦」。
- 65 『読売新聞』1973年9月25日。
- 66 千田夏光「24万軍馬の忘れられた戦歴」、『決断』5、1971年10月。
- 67 千田夏光「日本人が初めて人肉を食った戦場：30年めにつきとめた生き残り兵が明かす戦慄の体験」、『現代号5(7)、1971年7月、同「万人坑の悲劇は日本にもあった!」、『現代』6(2)、1972年2月。
- 68 千田夏光『従軍慰安婦・続篇』（三一書房、1978年）、157ページ。
- 69 千田夏光『従軍慰安婦悲史：戦史の空白部分を抉る』（エルム社、1976年）。千田は同書を書いた理由として、既にこの段階で双葉社の二つの著作が入手困難になっていたから、としている。千田夏光『従軍慰安婦・正篇』、9ページ。
- 70 千田夏光『従軍慰安婦・慶子：中国、ガ島、ビルマ…死線をさまよった女の証言』（光文社、1981年）。
- 71 毎日新聞関係者へのインタビュー。
- 72 千田夏光『植民地少年ノート』、211ページ。
- 73 千田夏光『植民地少年ノート』、213-214ページ。
- 74 千田夏光『従軍慰安婦・正篇』、131ページ。
- 75 例えば、千田夏光『オンナたちの慟哭：戦争と女性哀話』（汐文社、1981年）、同『涙痕 オンナたちの戦争』（汐文社、1985年）、同『戦争で涙した女たちのどうしても語りたかった話』（汐文社、1995年）。また千田の早い時期の従軍看護婦に関わる著作としては、『従軍看護婦：痛哭のドキュメント白衣の天使』（双葉社、1975年）。
- 76 千田は自らの回顧録の中でも、従軍看護婦の動員について触れている。千田夏光『植民地少年ノート』、159-165ページ。
- 77 例えば、千田夏光『未婚の母：加賀まりこから子連れホステスまで新しい性モラルの虚像と現実』（双葉社、1975年）、同『性的非行：女子中高生の非行を追って』（汐文社、1978年）、同『ハンカチ売りの非行少女』（汐文社、1982年）、同『女子大生花子』（汐文社、1983年）、同『女子高生は董色』（全国学校図書館協議会、1986年）、等。
- 78 千田夏光『ニコニコ売春』（汐文社、1994年）。
- 79 この点について関千枝子は、例えば1950年代後半においては、戦時の状況について回顧、調査記事を書く事に意味がある、という考えを新聞記者たちは有していなかった、と話している。毎日新聞関係者へのインタビュー。
- 80 毎日新聞関係者へのインタビュー。
- 81 千田夏光『従軍慰安婦・正篇』、131-132ページ。

# How the Comfort Women Discourse was Established in Japan: The Impact of Kako Senda's, *Jugun ianfu* (1973)

KIMURA Kan\*

## Abstract

In previous works, the author has pointed out that there was far more active discourse about comfort women taking place in Japan than in South Korea or international society before the end of the 1980s. This was because there was a different attitude in South Korea, where talking about the issue was regarded as being taboo or shameful, whereas it was easier in Japan to approach this issue. Consequently, many novels and articles relating to it appeared soon after end of World War II in Japan but not in South Korea. This early sign of discourse in Japan was also evident in South Korea until the 1970s, as a means of helping people to understand the issue.

However, that does not mean that such early discourse was similar to that carried out today. It certainly did not include clear points of view that explained the issue as a result of colonial rule or discrimination against women, but seemed to regard it as just one of the many tragedies of a miserable war undertaken by imperial Japan.

So when did the discourse about comfort women in Japan change and why did this occur? To answer these questions, we should turn to a famous book by Kako Senda, *Jugun ianfu* (Tokyo: Futabasha, 1973), which should be seen as being a significant turning point. Senda's book was the first best seller in Japan on the issue of comfort women and it was translated into Korean within a year of its publication. In South Korea, it was the first book in Korean that seriously analyzed the comfort system in detail.

However, the questions remain as to how he first became involved with this

---

\* Professor, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University.

subject and why his book was so influential. This paper identifies the reasons as follows:

Firstly, as a “child of colonial rule” who grew up in Dalian, China, Senda fully realized that Japanese discrimination against other Asian people was the key to analyzing the mechanism. It was therefore natural for him to describe the issue in the context of colonial rule.

Secondly, Senda was born in 1924 and belonged to a generation which was between those who actually experienced the battlefields of war and those who did not. He was mobilized by the Imperial army in 1944 but assigned to duties on the mainland, before being demobilized in Kagoshima, Japan at the end of the war. This meant that he was a rare soldier who did not experience the real horrors of war for himself.

He made effective use of his personal background. In his book, he made himself out to be someone who did not know anything about the “reality of war” and writes the story from the point of view of such a person who is trying to discover the true reality of life. When the book was published in 1973, most of the Japanese population consisted of the post-war generation, so adopting such an approach was a very effective way of bringing this issue to the attention of younger people. It made it clear that this was not just an event that had occurred in the past, but was something that directly related to themselves.